

地域連携・フロンティアセンター

2023（令和5）年度実績報告

目 次

I. 目的と運営	1
1. 目的.....	1
2. 組織運営	1
II. 事業	3
1. 地域連携委員会	3
1) 公開講座 / 誰でも学べる地域セミナー.....	3
2) ホームカミング・デー	8
3) 日赤広尾地域防災プロジェクト	9
4) 武蔵野地域防災活動	10
5) 日赤出張暮らしの保健室	11
2. 継続教育・実践研究委員会	14
1) 実習指導者研修会.....	14
2) フロンティアセミナー.....	20
3) 赤十字リサーチ・フェスタ	21
3. さいたま地域連携委員会.....	22
1) 公開講座	22
2) 大学コンソーシアムさいたま.....	23
3) UR 都市機構との連携	24
4) 埼玉県内における2つの赤十字病院の看護師への研究指導	25
5) 学内での活動の推進	26

I. 目的と運営

1. 目的

日本赤十字看護大学地域連携・フロンティアセンターは、日本赤十字看護大学が、これまでの知的・実践的な活動をもとに、人々に求められる看護を追究し、開かれた大学をめざして2005（平成17）年8月に開設された看護実践・教育・研究フロンティアセンターを前身としている。

斬新な発想で創造的な活動を行う必要があるという認識のもとにスタートし、10年目を迎えた2015（平成27）年度には地域連携の推進をその活動の中心的役割を担うことを目的に加え、本学が掲げる地域連携ポリシーのもと、地域連携・フロンティアセンターとして再び新たに出発した。

2017（平成29）年度に地域連携委員会とフロンティアセンター運営委員会が統合され、地域連携・フロンティアセンター運営委員会という組織に、同時に本学の地域社会連携ポリシーは地域社会連携、産官学連携が強調された組織、機能に改正した。

2020（令和2）年度、さいたま看護学部開学と共に、さいたま地域連携・フロンティアセンター運営委員会が組織された。また、2023（令和5）年度から、地域連携・フロンティアセンター運営委員会をフロンティアセンター会議とし、各部門で行っていた活動を委員会活動として行うことに組織を改正した。

本センターは、建学の精神である人道に基づき、地域住民の健康と福祉に資することを目的に、以下の機能を果たすこととする。

- （1）多様化する地域社会の中で、求められるニーズに対応しつつ、新しい看護活動の実践を推進する。
- （2）看護実践の研究活動を通し、その知見を学内外に発信する。
- （3）看護大学としての教育機能を、国内外の社会に貢献する資源として活用する。
- （4）開かれたフロンティアセンターとして、臨床看護実践者をはじめ学外の研究者等と協働する場を提供する。

2. 組織運営（図1）

地域連携・フロンティアセンターは、地域連携委員会、継続教育・実践研究委員会、さいたま地域連携委員会の3つの委員会において、事業活動を推進している。

地域連携委員会は、「地域社会の文化向上に資する講座」、「卒業生・修了生関連」、「地域防災」、「地域連携」を柱に公開講座、ホームカミング・デー、日赤広尾地域防災プロジェクト、武蔵野地域防災活動、日赤出張暮らしの保健室の各活動を。また、継続教育・実践研究委員会は、実習指導者研修会、フロンティアセミナー、赤十字リサーチ・フェスタの活動をそれぞれ展開している。さいたま地域連携委員会は、外部連携担当は公開講座やUR都市機構との協働事業、学生部会の発足により包括支援センター主催事業でのボランティア活動を行っている。内部連携担当は、FD・SD部会と協働して研修の開催、人材リソースの活用として先生マルシェと称してホームページにコンテンツ掲載をする準備を進めている。

地域連携・フロンティアセンター会議は、2023（令和5）年度は3回開催し、各事業の内容について共有、検証し、改善計画を提言した。

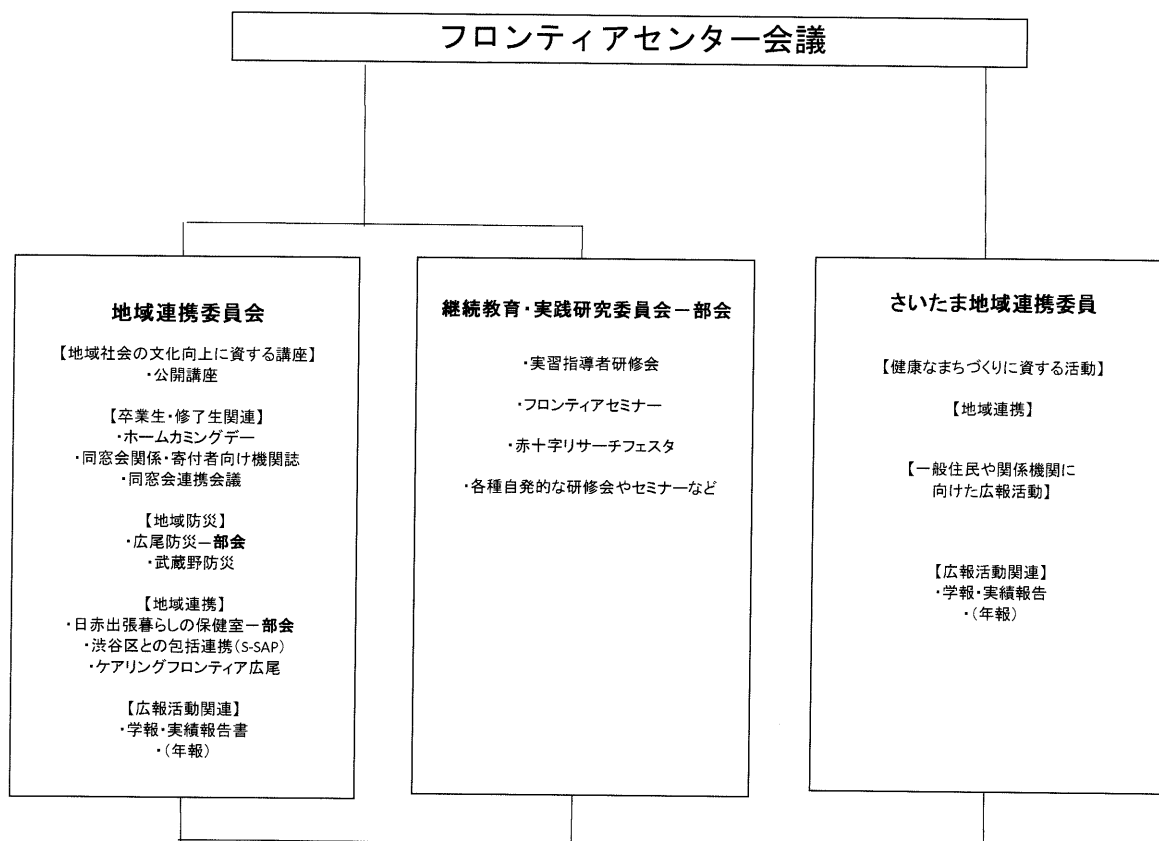
各事業実施にあたっては、学内の教職員、学部生の災害救護ボランティアサークル（SKV）や大学院学生をはじめ、これまでの事業に参加いただいている方や本学大学院修了生など幅広い力を得て運営している。

2013（平成25）年度に開始した広尾地区の保健医療福祉・教育が一体となってケアを創造するシステムとしての「ケアリング・フロンティア広尾」は、日本赤十字社医療センター、日本赤十字社総合福祉センター、日本赤十字社助産師学校、日本赤十字社医療センター附属乳児院、日本赤十字社幹部看護師研修センターと協働の、独立した組織として各プロジェクトの進捗を共有している。

図1

2023(令和5)年度 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター組織図

2023年4月1日



Ⅱ. 事業

1. 地域連携委員会

1) 公開講座 / 誰でも学べる地域セミナー

a. 趣旨

地域の方々と本学教職員が相互に研鑽し合えるような場となるような市民向けの講座として公開講座と、誰でも学べる地域セミナーを開催し、社会貢献・地域貢献に寄与することを目指している。

b. 活動内容

2023（令和5）年度の開催状況は、以下の表1の通りである。これまでCOVID-19感染拡大を予防するためにオンライン開催を一部採用していたが、2023（令和5）年度は全て、学内にて対面開催にて実施した。本年度は本学で開催された学会との共同開催の公開講座を1回、開催した。なお、コロナ禍を経て受講者数が減少しているため、本学の公開講座・セミナーを広く周知してもらう目的から、2023年度は「公開講座&誰でも学べる地域ナー通信」を作成し、大学ホームページでの公開と大学での配布を試験的に実施した。

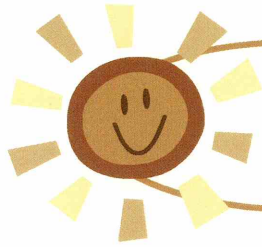
表1：2023年度に開催した一般市民向けセミナー

	テーマ	講師	開催日	受講者数
公開講座	①地球観測衛星からの メッセージを読み解く	久世暁彦先生	5月13日	98
	②日常から取り組む 防災・減災活動	内木美恵先生	6月3日	
	③現在社会と メンタルヘルス	白石弘巳先生	9月8日	
共催公開講座*	「白鷺のころ～過去から現在、そして未来へ～」	宮城野親方	8月27日	—
誰でも学べる 地域セミナー	「 ・生きる・物語 ―こころの健康―」	糸川昌成先生	12月9日	19

* 第30回日本産業精神保健学会諮問公開講座との共催

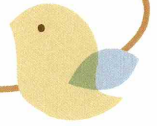
c. 来年度の課題と展望

2023（令和5）年度の講座に受講された方に協力いただいたアンケート調査の分析、受講される方々の特性を配慮し、社会貢献活動として本学に求められている内容の講座・セミナーを企画し、開催する。



日本赤十字看護大学
地域連携・フロンティアセンター

公開講座 & 誰でも学べるセミナー 通信



日本赤十字看護大学は、広尾キャンパスと大宮キャンパスがあり、各キャンパスにおいて地域の方々や看護職の方々などと相互に研鑽し合えるような場を目指し、様々な講座、セミナーを開催しています。ここでは、広尾キャンパスで開催している公開講座、誰でも学べるセミナーについてご報告、ご案内いたします。

◆令和5(2023)年度の公開講座

今、私たちはこの地球でどのように暮らしていくか

令和5年度の公開講座では、私たちが暮らす環境を‘地球’という視点でとらえ、より良く暮らしていくためにはどうすればよいか、3名のスペシャリストを講師にお迎えし、参加いただいた皆様と一緒に学びました。



第1回:地球とコミュニケーションしよう!

令和5年5月13日(土)開催

地球観測衛星からのメッセージを読み解く

—宇宙と大空から見えてきた!地球の温室効果ガス削減に向けたヒント—

講師:久世暁彦氏(JAXA第一宇宙技術部門 GOSAT-2プロジェクトマネージャー)

JAXA(宇宙航空研究開発機構)では、人工衛星による温室効果ガスなど地球環境に関する観測を行っています。地球温暖化の現状を知る上で貴重なその観測データは広く世の中に提供されており、国際的に高い評価を得ています。

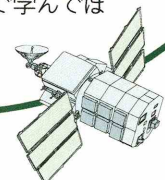
久世先生は、二酸化炭素(CO₂)濃度の上昇を引き起こす地球環境の変化、CO₂濃度の測定になぜ地球観測衛星が必要かなどについて、COVID-19によるロックダウンとCO₂濃度の関係などのトピックスをまじえながら話し下さいました。さらに、より効果的なデータ収集方法を探求し、現在では観測に旅客飛行機を活用するなど、豊富なデータを得ることに成功していることもご紹介くださいました。

地球温暖化について、現状を正しく知り、何が問題なのかを考え、その問題解決にむけて具体的なアクションを起すことの重要性を再認識する機会となりました。



参加者の声

- JAXAの役割を具体的に知ることができてよかった。
- 身近なことなのに興味がなかったテーマのお話を聞き、関心を持ちました。一万色の世界、興味深かったです。
- 今回の内容を小中高の教育で学んでほしいと思いました。



人工衛星で地球観測 久世暁彦先生と人工衛星いぶき

久世先生のご講義は、地球環境問題を考える貴重な機会となっただけでなく、一般に周知されていないJAXAの重要な事業の一端を知る、とても有意義な時間となりました。

久世先生は、JAXAが2009年に打ち上げた温室効果ガス観測技術衛星「いぶき」(GOSAT)、 「いぶき2号」(GOSAT-2、2018年打ち上げ)の運用を担うリーダーとして、観測精度の維持・向上にむけて日夜活動されています。このお仕事には、大変なご苦勞もおありのようです。その一端をお話下さいました。

「人工衛星は打ち上げ時や、何らかの不具合が生じた時だけ華々しく報道されます。

ですから、これは皆さんには知られていないことですが、私たちは打ち上げ後、人工衛星の使命である地球観測を行うために、絶えず状況を把握し、サポートを続けているのです。たとえるなら、病院と似ています。病院では患者さんを24時間見守り、何らかの異常があればそれを早期発見して処置を講じる、それと同じです。そして現在、いぶきは14年、いぶき2号は5年目ですが、今もその使命を果たし続けています。」

いぶきの打ち上げから14年、久世先生はそのサポートを行うため、絶えずパソコンを手元に置き続ける生活が続いているそうです。スペシャリストの絶え間ない努力が、私達に地球温暖化に関する貴重なデータをもたらしてくれているのだということもわかりました。

* 講義に登場した人工衛星いぶきは、つくば宇宙センターにある展示館(スペースドーム)で原寸大試験モデルをみることができます。そのほかにも宇宙に関する様々な展示がありますので関心のある方は、JAXAのホームページで確認の上、ご見学されることをおすすめします。 展示館は無料公開されています。



▲久世先生と人工衛星いぶき試験モデル

第2回:災害に備えよう! 令和5年6月3日(土)開催

日常から取り組む防災・減災活動

講師:内木美恵氏(日本赤十字看護大学 教授)

‘避難所’と‘避難場所’はどう違うか、この問いかけを皮切りに、内木先生の講義は私たちの防災に関する知識があやふやであることの気づきをもたらすことから始まり、災害は私たちの生活にどのような支障をもたらすのか、その支障は私たちの生活そして健康に具体的にどのような影響を及ぼすのか、説明されました。さらに、被災後の生活について避難所と在宅避難のメリット、デメリットが示され、自分は被災後にどのように生活していくのかを参加者各自がイメージすることができて、日頃からの様々な備えの大切さを実感する内容でした。講義の合間には、避難生活では衰えがちな筋力を維持するための体操を実際にやってみるセッションもあったので、適度に心身をリラックスさせつつ、参加者個々が「今、自分がやらなければいけない災害への備え」を具体的に考える、とても有意義な時間となりました。

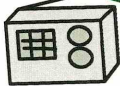


▲第2回「災害に備えよう！」の講座の様子



参加者の声

- ・多面的な話、ためになりました。持ち出し品リスト、早速作ろうと思いました。
- ・実践できることも多く教えていただき、実施してみたいと思うことが多かったです。
- ・公助だけに頼らず、自助・共助が必要だと感じた。



第3回:心の声、身体の声を聴こう！ 令和5年9月8日(金)開催

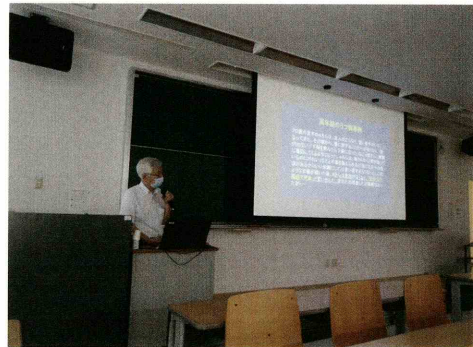
現代社会とメンタルヘルス

講師:白石弘巳氏

(なでしこクリニック院長、精神科医)

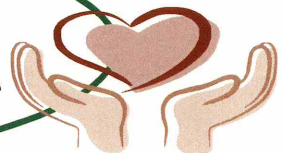
経済の低迷、COVID-19の感染拡大などにより、暮らしにくくなっている‘超ストレス社会の日本’の現状について提示された後、ストレスとは何か、ストレスが心身の健康に与える影響、さらにはストレスに関連する心の病について具体的にお話下さいました。

そして、ストレスに負けない生き方として、①自分らしい生き方について考える、②よい生活習慣を維持する、③自分に合ったストレス発散法を見つける、の3つのポイントから具体的な生活行動を示して下さいました。最後に、このストレスフルな現代社会を生き抜く上で、‘相談する力’がとても重要であるということが語られ、白石先生の「相談する力をもつ人は自立している」という言葉はとても印象的でした。



参加者の声

- ・「ストレス」は常に心に引っかかっている。とても大切なテーマ、有意義だった。
- ・日々の生活を丁寧に生きて、正しくストレスに向き合うことを学びました。
- ・白石先生のような知識、経験が散りばめられた内容で非常に楽しく聴かせていただきました。幸福の数式、私もやってみようと思います。



令和6(2024)年度の 公開講座のお知らせ

令和6年度は、「自分らしく最期まで生きるーこれからの人生を考えよう！」をテーマとして、人生100年時代を自分らしく生きるにはどうすればよいか、を学びます。

講師には実践女子大学教授の原田謙氏をお招きするほか、本学講師白井美穂氏によるイキイキ体操を体験する回もある、2回シリーズです。講座の詳細、お申し込み方法などは本学ホームページをご覧ください。

皆様のご参加をお待ちしています！

日本赤十字看護大学 公開講座

「自分らしく最期まで生きる」
これからの人生を考えよう！

人生100年時代、これから先も自分らしさをもって楽しく生活していくための考え方や価値観・身体づくりについて一緒に考え学んでいきましょう！

開催日 2024年 10/5, 11/2 sat 参加無料

第1回 人生100年時代のライフスタイル：家族と地域から考える
 日時 2024年10月5日(土) 11:00～12:00
 開場 10:30～
 会場 日本赤十字看護大学 原田 謙氏

第2回 健康で自分らしく生きるためのイキイキ体操
 日時 2024年11月2日(土) 11:00～12:00
 開場 10:30～
 会場 日本赤十字看護大学 白井 美穂氏

主催 日本赤十字看護大学
 各回定員50名 要申込みに申し込み方法があります

■開催へのアクセス
 1. 会場・東京駅南口から徒歩15分
 2. 池袋駅東口から徒歩15分
 3. 池袋駅東口から徒歩15分
 4. 池袋駅東口から徒歩15分
 5. 池袋駅東口から徒歩15分
 6. 池袋駅東口から徒歩15分
 7. 池袋駅東口から徒歩15分
 8. 池袋駅東口から徒歩15分
 9. 池袋駅東口から徒歩15分
 10. 池袋駅東口から徒歩15分

◆令和5(2023)年度の誰でも学べるセミナー ‘生きる’物語 —こころの健康—

令和5年12月9日(土)開催



糸川先生は、こころの健康にはその人の‘生きる’物語を取り扱うことが必要であり、さらに、こころの傷つきを体験した人々の快復には、‘人生の文脈を生きる人’として丁寧に扱うことが重要であるとお考えです。

セミナーでは、これまで糸川先生がめぐりあった数名の方について、人生の文脈をどのように生きているのかを丁寧に紐解きながら、参加者に語りかけて下さいました。その優しい語りにも耳を傾けながら、各自が自分自身の、もしくは自分の家族の‘生きる’物語に思いを馳せるひとときとなりました。

参加者の声

- ・こころの健康が身体に与える影響がいかに大きいものか知らされました。
- ・不安などの症状はあってはならないものではないという意味、脳の恒常性、ひとつひとつが心にさざりました。
- ・自分の物語りを振り返り、価値観が変容した時を思い出しました。
- ・生きる物語の‘物語’の意味がよく分かりました。

◆公開講座 & 誰でも学べるセミナーだより 編集責任者：鷹野朋実(地域連携・フロンティアセンター)

◆公開講座、誰でも学べるセミナー

お問い合わせ先：日本赤十字看護大学 企画課

〒150-0012 東京都渋谷区広尾4-1-3

TEL.03-3409-0682 FAX.03-3409-0589



日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター

2) ホームカミング・デー

a. 趣旨

本学卒業生・修了生を対象として交流の場や学びの機会を提供することを目的として年1回開催する。

b. 活動内容

2023（令和5）年10月21日（土）に日本赤十字看護大学大学院開設30周年記念事業・共催シンポジウムとして、修了生をシンポジストに迎え、「看護の知を語り合い、未来につなぐ」をテーマにシンポジウムを開催した。

参加者は、教員55名、職員4名、退職教員7名。卒業生・在校生32名の合計98名であった。
アンケート結果は、回収率16%であったが、概ね好評であった。

シンポジウムでは、退職された教員や卒業生、修了生からの質問があり、活発な意見交換が行われた。

c. 今後の課題と展望

次年度以降は、参加者を確保することが課題であり、領域ごとに輪番でテーマを決め、開催する方向で開催方法を検討していく。



学長挨拶



シンポジウム



シンポジウム



研究科長挨拶

3). 日赤広尾地域防災プロジェクト

a. 趣旨

プロジェクトの目標は、広尾地区の日赤 6 施設（看護大・医療センター・総合福祉センター・乳児院・助産師学校・幹部看護師研修センター）の連携と各施設の防災機能強化と人材育成、災害時のスムーズな連携を目的とする。さらに行政・医師会・住民組織等を巻き込み、広尾地区における防災連携範囲を広げることである。

b. 活動内容

①子ども食堂出張防災講座（4回）

2022（令和 4）年度に活動を開始し 2 年目となり軌道に乗ってきた。メンバーが本学災害救護ボランティアサークル（SKV）の学生と共に、渋谷区内の子ども食堂に伺い、「非常食のローリングストック」「ぼうさいすごろく」「ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん！」等のテーマで 4 回の出張防災講座を実施し親子 20 名（感染予防のため各回 5 名までに参加人数制限中）が参加した。子ども食堂運営の地域住民からは「子どもが楽しく参加できるよう一緒にクイズにチャレンジ頂き来場者は有意義なひと時だったと思う。防災の重要性を再認識させられた」との感想が聞かれた。

②渋谷区防災キャラバン出展（1回）

11/18 に医療センター・日赤本社・本学 SKV のメンバーが中心となり出展した。ブースでは、子どもの救護服試着体験、医師によるドクターカーの試乗対応、認定看護師による小児 BLS（小児蘇生法）、三角巾デモンストレーションを実施した。参加者は 1,500 名程度で、本ブースには 100 名ほどの来場があった。参加者に医療センターから三角巾の提供があり、中学生が主に参加していた。

③BCP（事業継続計画）勉強会（3回）

3 回開催し、医療センター丸山医師の講義、総合福祉センターのBCP閲覧、受援支援体制マッピング等のテーマで広尾地域の災害時連携体制を見直した。

c. 来年度の課題と展望

今後も地域防災活動を継続する。広尾地域 6 施設の連携も進める。

- ・子ども食堂へのお出張講座、住民との連携を継続する。
- ・防災キャラバンの継続、スタッフの人数を増やし、相談活動などにも対応できるようにする。
- ・広尾地域 6 施設のうち助産師学校の参加をお願いしていく。

4) 武蔵野地域防災活動

a. 趣旨

1) 武蔵野地域防災セミナー

武蔵野市防災課、武蔵野市民防災協会、武蔵野地域防災活動ネットワーク（COSMOS）、および本学国際・災害看護学領域の大学院生、学部災害救護ボランティアサークル（SKV）の学生等、教職員が共同してセミナーを企画運営し、武蔵野市民を主な対象として、市民防災力の向上を目指している。

2) 武蔵野市総合防災訓練（医療連携訓練）

武蔵野市の医師会、歯科医師会、薬剤師会、助産師会等と3つの病院、防災課および本学が参加し、緊急医療救護所、緊急医療救護所活動、医療連携訓練、感染対策などの検討を目的に活動している。

b. 活動内容

1) 武蔵野地域防災セミナー

避難所・避難生活をメインテーマに5回実施し、延べ92名参加した。

- ・第1回：10月28日14時-16時「避難所運営ゲーム」をテーマに武蔵野市防災課、武蔵野市民防災協会が主で企画し、本学からはSKV4名、大学院生5名、運営に教職員2名。参加者9名。
- ・第2回：11月23日9時-14時、境南防災対策会主催「避難所立ち上げ訓練」に本セミナーがジョイントし、COSMOSが企画し、本学からはSKV7名、運営に大学院生2名。参加者9名。
- ・第3回：12月2日14時-16時「発災後1週間の避難所生活体験」をテーマに、本学国際・災害看護学領域大学院生(1年生)が主で企画し、SKV8名、大学院生5名、運営に教職員3名。参加者17名。
- ・第4回：2月10日13時～16時「安全な避難行動を考える」をテーマに、COSMOSが企画し、本学からはSKV5名、運営に大学院生2名。参加者27名。
- ・第5回：3月9日14時～16時「在宅避難・備蓄物品を考える」をテーマに、本学国際・災害看護学領域大学院生(2年生)が主に企画し、SKV4名、大学院生5名、運営に教職員3名。参加者30名。

2) 武蔵野市総合防災訓練（医療連携訓練）

10月22日（日）9時～12時、医療救護所をむさしの市民公園に設置し、武蔵野陽和会病院で、医療救護本部との通信訓練及び寸劇方式によるトリアージおよび、傷病者受け入れ訓練を実施した。本学からはSKV7名、教員1名が参加した。

c. 来年度の課題と展望

1) 武蔵野地域防災セミナー

4月から会議開始し、6回のセミナーを実施する予定。演習を多くし、より住民参加型にし、対象を絞った出前講義も検討する。

2) 武蔵野市総合防災訓練（医療連携訓練）

次年度もSKV 学生と共に参加し、医療救護について検討する機会とする。

5) 日赤出張暮らしの保健室

a. 趣旨

地域住民の気軽な健康相談及び健康増進活動への動機付けの機会とし、健康教育や交流を通して、住民だけでなく介護者及び支援者支援の場とする。

b. 活動内容

◆第1回 2023（令和5）年6月22日（木）13時30分～15時

参加者：26名 居住者22名（内訳：男性4名・女性18名）

地域住民（主に東二丁目第2アパートの居住者）・介護者・支援者

ひがし健康プラザ地域包括支援センター職員4名、教員3名、大学院生1名

【学びあいセミナー】13時40分～「認知症の方との対話」講師：石田千絵（本学地域看護学教授）

参加16名（男性2名・女性14名）

【健康相談】血圧・脈拍測定、健康に関するお困りごと相談



こんにちは！日本赤十字看護大学です！

日赤出張暮らしの保健室 第1回開催

今年度は4回開催予定
参加費無料で予約も不要です
いずれの時間も出入り自由です
お気軽にお立ち寄りください

6月22日（木）
13:30～15:00
場所：集会室

【学びあいセミナー】
13時40分～
「認知症の方との対話」

【健康相談】

- ・ 血圧・脈拍測定
- ・ 健康に関するお困りごと相談

日本赤十字看護大学



◆第2回 2023（令和5）年10月19日（木）13時30分～15時

参加者：11名 居住者8名（内訳：女性8名）

ひがし健康プラザ地域包括支援センター職員1名、渋谷区社会福祉協議会職員2名

教員2名、大学院生3名

【学びあいセミナー】13時40分～「フレイルについて」

講師：石川喬也・志村水輝・幡野亜希子（本学大学院 地域看護学領域修士1年）

【健康相談】血圧・脈拍測定、健康に関するお困りごと相談

◆第3回 2023（令和5）年12月21日（木）13時30分～15時

参加者人数：8名（+家族1名）、民生委員1名、自治会長1名、教員3名

【学びあいセミナー】13時40分～「血圧ってなに」

講師：大矢綾・佐藤香菜・松尾晃希（本学大学院 看護管理学領域修士1年）

【健康相談】血圧・脈拍測定、健康に関するお困りごと相談

こんにちは！
日本赤十字看護大学です
日赤出張暮らしの保健室
R5年 第2回 開催

日程：10月19日(木)
13:30～15:00
場所：集会室

テーマ「食欲・運動・健康の秋」

【学び合いセミナー】
13:40～
「フレイルって何？元気に過ごす秘訣とは」

【健康相談】
・血圧・脈拍測定
・健康に関するお困りごと相談

参加費無料で予約も不要です
時間内、出入り自由です
お気軽にお立ち寄りください

日本赤十字看護大学
Japanese Red Cross College of Nursing

こんにちは！日本赤十字看護大学です
日赤出張暮らしの保健室
2023年度
第3回 開催

日時：12月21日(木)
13:30～15:00
場所：集会室

テーマ
『年末年始を健康に過ごそう』

【学び合いセミナー】
『血圧ってなに』

*体操を行うため手ぬぐいサイズの
タオルをご持参ください!!

【健康相談】
・血圧および脈拍測定
・健康に関するお困りごと相談

※参加費無料・予約不要です
時間内、出入りご自由です
お気軽にお立ち寄りください

日本赤十字看護大学
Japanese Red Cross College of Nursing



タオルを使って下肢運動

◆第4回 2024(令和6)年2月26日(月)13時30分～15時

参加者：9名 居住者9名(内訳：男性1名・女性8名)

ひがし健康プラザ地域包括支援センター職員1名

渋谷区社会福祉協議会 南部圏域生活支援コーディネーター1名、教員3名

【学びあいセミナー】13時30分～「少し外出してみませんか？～外に出てみることの利点～」

講師：佐藤太地(本学地域看護学助教)

【健康相談】血圧・脈拍測定、健康に関する困りごと相談

こんにちは！日本赤十字看護大学です！
**日赤出張暮らしの保健室
第4回開催**

参加費無料で予約も不要です
いずれの時間も出入り自由です
お気軽にお立ち寄りください

2月26日（月）

13:30 ～ 15:00

場所：集会室

【学びあいセミナー】

13時40分～

「少し外出してみませんか？

～外に出てみることの利点～」

【健康相談】

- 血圧・脈拍測定
- 健康に関するお困りごと相談

日本赤十字看護大学



c. 来年度の課題と展望

- 自治会や民生委員、地域包括支援センター、社会福祉協議会の方々とも緩やかながら、しっかりとつながりが深まっている。このつながりを大事にしながら、来年度も年4回の開催を目指す。
- 本活動は、学生にとっても学びの場となることが分かってきたので、学生も巻き込んでいく方向で検討する。
- 本学の地域への貢献を外部にもアピールすることを意識して広報する。

2. 継続教育・実践研究委員会

1) 実習指導者研修会

a. 趣旨

実習指導者研修会は、日本赤十字看護大学（広尾キャンパス）と日本赤十字社医療センター、武蔵野赤十字病院、大森赤十字病院、東京かつしか赤十字母子医療センター、横浜市立みなと赤十字病院が共同で企画・運営している。赤十字施設には、看護師養成の長い歴史があり、教育と臨床が共に協力し連携して、後輩を育てる姿勢がある。看護学教育における実習の意義および実習指導者としての役割を理解し、効果的な実習指導につなげられるように、実習指導者を育成すること等を目的にした研修会である。赤十字施設以外の看護学実習を受け入れている医療機関等の方も参加可能であり、各講義単位での受講も可能な公開講義を設けている。

b. 活動内容

本研修会は、本センターの継続教育・実践研究委員会に位置付く実習指導者研修会部会を構成する教職員 8 名（学内企画委員）が中心となり、学外企画委員として日本赤十字社医療センター、武蔵野赤十字病院、大森赤十字病院、葛飾赤十字産院、横浜市立みなと赤十字病院に所属する看護職者（各施設 1 名、合計 5 名）と協働し、初めて WEB での研修会を開催した。

2023（令和 5）年度は学内会議を 4 回、学内外の委員による企画会議を 3 回開催の上、研修会の準備を行い、対面開催 2 回、WEB 開催 2 回で研修会を行った。

開催期間は 6 月～1 月とし、開催回数は 4 回、研修会の構成は実習指導に関する理論・演習・リフレクションとした（詳細は別紙参照）。学内演習の見学などのオプションは、今年度は感染状況をみながら、後期の学内演習の公開を再開した。成人看護学領域の「モニター心電図・12 誘導心電図」の演習に 2 名、小児看護学領域の「3 年生の実習前看護技術演習」に 2 名の研修生が参加した。また大森赤十字病院（研修生 9 名）および横浜市立みなと赤十字病院（研修生 1 名）では、自施設内での実習指導の見学等を行い学びを深めた。研修生のモチベーション維持と研修成果の確認を目的とし、リフレクションシートの提出は前年度に引き続き行い、各赤十字施設の担当者にも内容を共有した。

全公開講義は、実習委員会の FD として位置づけ、川上先生の「発達障害及びその特性をもつ看護学生の理解と実習指導」については、障がい学生支援委員会の共催 FD とした。

研修会の修了要件は全体の 3/4 の出席を条件であり、最終的な修了生は 72 名（赤十字施設 66 名、その他施設 6 名）であった。公開講義（FD 除く）の参加者数は学外 34 名、学内（大学院生 58 名、教職員 4 名）であった。研修生へのアンケート結果からも、開催回数（全 4 回 ととてもよかった(36%)、よかった (61%)）、プログラム内容（とてもよかった (41%)、よかった (57%)）についても、適切な回数かつ有意義な内容の研修会であったことが伺えた。

c. 来年度の課題と展望

WEB 開催における研修生からの通信環境やトラブルは殆どなかった。各講師の先生方も WEB 開催でも対面同様に双方向性を重視した積極的に参加できる環境を作ってください、研修生の満足度も高かったと評価できる。アンケートにおいても、グループワークは対面がよい、講義だけなら WEB がよいという意見もあるため、次年度も WEB と対面それぞれのメリットを組み合わせたい開催とする。例年通り、受講生のアンケート結果等も参考にし、よりニーズを反映した研修会を目指していく。さらに、「実際の学生指導の場面を見学（動画）し、指導の様子や学生の反応などを知る機会があるとよかった」という意見があり、後期の学内の演習の見学の機会を設けたが、参加者は少ない現状があった。コロナ禍を経て、

WEBでの学修機会が好まれる傾向があると考えられた。今後、この研修会を継続していくために、講義の一部はe-learningにすることも検討し、研修会の発展性ととも、継続性についても議論しながら、将来的な方向性も検討していく。

2023年度 実習指導者研修会プログラム

開催月日	時間	プログラムの内容	講師
2023年 6月14日 (水) Web開催 受付開始: 8:30	9:00-9:30	開講式／オリエンテーション	
	9:30-10:30	教育課程と実習の位置づけ	企画委員 実習担当教員
	10:40-12:10	実習指導概論 実習指導の展開と実習指導者の役割、実習指導の過程・方法	佐々木幾美先生 本学 教授
	13:00-14:30	リフレクションの概念	西田朋子先生 本学 准教授
	14:40-16:10	教育心理 -学習者の心理- 人間の発達、学習過程における心理、学生の特性	遠藤公久先生 本学 教授
	16:20-16:50	オリエンテーション	
8月9日 (水) 対面開催 受付開始: 8:30 ガイダンス 8:50	9:00-10:30	実習指導の計画①	企画委員 実習担当教員
	10:40-12:10	対人関係論	鷹野朋実先生 本学 教授
	13:00-14:30	教育方法 -状況に埋め込まれた学習- 状況的学習論、正統的周辺参加論	有元典文先生 横浜国立大学 教授
	14:40-16:10	実習指導の計画② Group Workにて、教育カリキュラムと実習の位置づけを検討し、実習指導案を作成する	企画委員 実習担当教員
8月～11月	実習指導に関する実習（実習指導案を用いた展開）		
11月27日 (月) Web開催 受付開始: 8:30 ガイダンス 8:50	9:00-10:30	実習指導のリフレクション Group Workにて、実習指導についての振り返りを共有する	企画委員 実習担当教員
	10:40-12:10	発達障害及びその特性をもつ看護学生の理解と実習指導	川上ちひろ先生 岐阜大学 併任講師
	13:00-14:30	看護理論 看護の概念、看護の知と実習指導	川原由佳里先生 本学 教授
	14:40-16:10	医療・看護の動向と実習	安部陽子先生 本学 教授
2024年 1月29日 (月) 対面開催	9:00-10:30	看護倫理 -実習指導を通して伝える看護- 看護と倫理、実習指導と倫理	吉田みつ子先生 本学 教授
	10:40-2:10	教育原理 -教育原理と実習指導- 教育の意義、目的、教育活動の特性、人を育てる(教育)観	渋谷真樹先生 本学 教授

受付開始: 8:30 ガイダンス 8:50	13:00-15:00	実習指導の体験を語り合う：全体のまとめから課題への具体的チャレンジ Group Work にて、立案した実習指導案を用いて振り返りを行い、実際の実習指導で得た学びを深める 実習指導体験の共有、学びや課題の深化、具体的チャレンジに関するディスカッション
	15:30-16:00	修了式・閉講式

全4回の研修会の概要とアンケート結果

■第1回:2023(令和5)年6月14日(水)

開校式、オリエンテーションに続き、①教育課程と実習の位置づけ ①実習指導概論 ③リフレクションの概念、④教育心理についての講義が行われた。

①教育過程と実習の位置づけ：本学が教育理念と教育目標をもとに、講義・演習・実習の有機的な結びつきに取り組んでいること、各学年で体験する実習での反応そして実習指導者と大学教員の連携の重要性について説明した。アンケート結果でもとてもよかった38%、よかった58%であった。学年や実習によって学生の特徴や求められることが違うこと、講義、演習、実習の積み上げが大切ということなどを学んだなどの感想があった。

②実習指導概論：具体的事例を用いての講義の構成であった。一つ目の視点である「授業としての実習の意味」では、4年間の教育の中で、「講義」「演習」「実習」が結びつき、積み上げていくことで力をつけていき、様々なことに気づいていく過程であるため、支援者や対象者からのフィードバックを受けることで看護に対する「関心」と「意欲」を高め、自己の看護観を培う場である。「看護学実習における指導者の役割」は、指導の対象となる学生に指導内容を合わせていくことは、不安や緊張、知識や理解が不十分な学生にとっては重要なことであることが分かった。「学生の学びを支援する関わり」は、「発問を多用しない」ことや「自分がそこにいてもよい」「いる価値がある」と感じられるような関わりを持つことが重要である。これらの講義の内容から、実習指導を行う上で必要なことは、臨床実習がもつ意味を指導者が理解し、その限られた機会が学生にとって、意味づけされた経験となるためには、教員と指導者が協働して学習環境の構築に務め、学生が意思決定に参加できるような働きかけが大切である。講義後の研修生の感想でも、新人指導にも活かせる内容であるという多くの感想が寄せられた。アンケート結果でも、とても良かった72%、良かった26%であった。

③リフレクションの概念：西田先生の体調不良により、2021年度の研修会で講義した動画を配信する形となった。今回の講義のために資料の差し替えがあり、対面研修時に補足講義動画を配信することとした。グループワークではブレイクアウトルームの設定に時間を要し、受講生同士の交流の時間は短くなってしまったが、午後の講義でありグループワークは有効である。講義では、「リフレクションの概念」「リフレクションによって学習者としての基本的能力を獲得できること」「経験学習モデルに結び付けて、内容から得られた教訓を概念に落とし込み、新たな状況に適応させること」を学習した。学生が指導者からフィードバックを受ける時、恐怖心を抱く可能性がある。リフレクションを実施するために「傾聴する」「承認する」「オープンでパワフルな質問をする」スキルを学生指導に役立てていけるとよい。アンケート結果は、とても良かった58%、良かった40%であった。

④教育心理：教育支援：対象(学生)を理解するとして、「生涯発達の視点からみた青年期の特性」と「学習者の心理過程」の2つを講義があった。青年期という精神と身体がアンバランスな状態の対象について、時代変化と他国との文化的背景の違いが、学生の自己観の捉え方に関わっている。また青年期特有の状況、最近のSNS社会とコロナ禍での影響を、普段接している学生の例も併せて示してくださった。学習者としての学生は、レジリエンスの個人差が大きく、外発的な動機付けから、いかに内発的な動機に変えていけるかが指導する側に求められる。成功体験を積み重ね、自己効力感の醸成に結び付

け、主体的な学びに繋げる環境づくりが大切だと学ぶことができた。講義後、1つの質疑応答があり、研修生も積極的に参加している様子が見えた。アンケート結果もとても良かった79%、良かった21%であった。

■第2回:2023(令和5)年8月9日(水)

8月9日の2回目の研修会は、①実習指導の計画①、②対人関係論、③教育方法、④実習指導の計画と実習指導の内容で、対面で行われた。

①実習指導の計画①：プログラムは①講義と②演習の2部構成であり、①では、稲田千晴先生にご講義を頂いた。講義として実習指導者の役割、実習要項の役割などお話しいただき理解を深めていた。また、実習の一場面を教材化し学生とともに言語化しながら学んでいく重要性を学ぶことができた。そして実習指導計画を作成する上で、「モデリング」「ファシリテーターのスキル」を学び、今後も高めていくことが大切であることが理解できた。演習では、今回初の対面でのグループワークとなり事前課題を含め情報共有など午後の講義に向け活発な意見交換ができていた。アンケート結果もとても良かった30%、良かった70%であった。「具体例がありわかりやすかった」などの感想があった。

②対人関係論：実習指導の基本原則について理解を深めた。看護は高度な対人関係のスキルが求められるため、対人関係を学ぶ場としての臨地実習の意義を理解することができた。学生との関わりにおいては、学生には学生の思いや考えがあるという点や自分の感情が伝わるという点を踏まえた上で、実習指導における共育の重要性やアサーティブコミュニケーションの必要性が理解できた。また、コミュニケーションを吟味するために、精神科領域のみならず、色々な場面でプロセスレコードが活用でき、プロセスレコードをツールとしてトレーニングすることで、看護ケアの質向上が期待できることを理解できた。アンケート結果は、とても良かった44%、良かった53%であった。「プロセスレコードをどのように実践に活かすべきか理解できた」などの感想があった。

③教育方法：教育方法の単元における有元先生の講義は、研修生同士が「協働する」ことを体験できる内容であった。先生の「ひとりで行う教育は独り言」という言葉が印象的であった。人間の反応や特性、思い込み、傾向などを体験し、お互いに考え、協働しあいながら事象を一つ一つ乗り越えていく研修は、笑顔にあふれた研修だった。あまり相手のことを知らない研修生同士が同じ目的のために協働しあうには、挨拶やあいづちなどのコミュニケーションから、相手の気持ちを想像して行動に移す必要があった。また、相手の行動に合わせ、自分を修正していく必要もあった。これらが「指導は協働だから思い通りにはならないこと」につながる。その大前提を知っていると知らないのでは、教育をする側のきもちも変わってくる。そしてそれは、教育を受ける側の「心理的安全性」を作ることにもつながる。「ふつう」でいい場を作ることこそが、教育に不可欠であり、「やりたくさせる」ことが、教育には大切なことだと感じた講義であった。アンケート結果でもとても良かった60%、よかった37%、であった。「学習者の立場を体験できた」などの感想があった。

④実習指導の計画②：領域ごとに事例を用いて、実習指導案(週案・日案)をグループワークで検討した。実習要綱にある目標を確認し、指導目標を立案したがレベルⅡとは学生はどのような状態なのかイメージできず目標設定が高くなってしまったと気づき修正していた。演習Ⅰで学習した実習指導案に取り入れたい学生の学びを支援するかわりの7つの要素が盛り込まれているか最終できあがったもので確認した。日頃実習指導のかわり方で実践してきたことではあるが、指導の意味づけを確認することができた。事例の場面からどのように切り取るのか、伝えたいことは何かなど多くの意見が聞かれた。前講義「協働する場づくりとしての教育方法」での体験学習により、グループワークでの意見交換が円滑に行えているように感じた。対面で研修を行うメリットが感じられた。アンケート結果は、とても良かった36%、よかった61%、どちらでもない3%であった。「各施設の現状を共有でき、意見交換することで具体的な方策を考えることができた」など、交流を交えて、今後の実習指導案の作成に向けて、準備できた様子であった。

■第3回:2023(令和5)年11月27日(月)

11月28日は①実習指導のリフレクション、②発達障害及びその特性をもつ看護学生の理解と実習指導、③看護理論、④医療・看護の動向と実習の構成でWEB開催で行った。

①実習指導のリフレクション: Zoomにて各ルームに分かれ、印象に残った指導場面の共有と意味づけ、気づきと課題をグループワークで行った。リモートのためか、最初のうちは司会進行の役割や発言がほとんど聞かれず、ファシリテーターによる問いかけ、助言がかなり必要であった。その後少しずつ研修生同士の発言が増えて、自分の言葉で共有できていた。研修生からは「コミュニケーション」「大人の学習者」「学生のありのままをいったん受け止める」「学習への動機づけ」など、今までの研修内容と実践の内容を結び付けて意味づけることができていた。課題としては、学生の態度や、学習姿勢に未熟な面もあり戸惑うこともあるが、発達状況や学生の傾向を考えて指導できるようにしたい。できないことやそのままを受け止められるようにしたいとの発言があった。他グループの状況は分からないが、自身としてワークの初めにアイスブレイクの時間を設け、場づくりを行う必要があったと反省する。今後最初からワークの中に設定してもよいかと考える。アンケート結果は、とても良かった42%、良かった52%、どちらでもない6%であった。「他のメンバーの方や教員と話すことで理解が深まった」などの感想があった。

②発達障害及びその特性をもつ看護学生の理解と実習指導: 発達障害の特性についての説明や特性に見合ったかわり方、調整・配慮・支援の進め方や流れにつなぐなど説明いただき、学ぶことができました。学生に対する支援についても、一人で対応するのではなく地域、家族などいろいろな部門と連携することが必要であることの理解が深まりました。また、「診断名」で学生を判断せずその人を理解するための「参考資料」の言葉がここに残りました。アンケート結果は、とても良かった51%、良かった48%であった。「個性に向き合い、指導を検討することを学んだ」などの感想があった。

③看護理論: 臨床のなかで看護理論に言及する意味やなぜ看護理論なのかについて、学生の学びを中心に考えることができた。看護理論については、その構造と機能について、オレムのセルフケア不足理論を例に、また役割については、地図・視座・価値について理解を深めることができた。臨床指導においては、ニードと自立・日常生活のケアの2場面を例にE.ウィーデンバック、F.ナイチンゲール、V.ヘンダーソンの理論に基づいて学ぶことができた。研修生はいくつかの看護理論に触れ、看護はなにをする人なのかを考察し、看護を探求していく機会を得ることができたと考える。アンケート結果は、とても良かった39%、良かった55%、どちらでもない5%であった。「少し難しく感じた」「日々のケアの場面を理論に基づき振り返ることで意味づけができた」などの感想があった。

④医療・看護の動向と実習: 現少子高齢化社会に対応した社会保障制度の整備が近年の課題であり、具体的には病床確保に対する制度、看護職員の養成拡大、潜在看護師の活用、タスクシフト、看護職員の確保対策の推進などが具体的に実施されている。また、行政とも連携して看護職員の人材活用システムが構築されている。2040年へ向けて生産年齢人口が減少していく中での看護師等の確保の推進が必要であり、療養の場が多様化する医療の現状から、実習の場においても地域を含め多様な場での実習の充実が望まれている。一方、実習施設側は複数の教育施設からの依頼を受けており、実習施設が足りない現状や実習指導者が業務の兼任や育児短時間などで十分に指導できないなどの課題、急性期病院は急性期としての細分化を図ったり、在院日数を減らす現状から、十分な学習目標が達成できなかったり、複数名患者を受け持つなどの課題があげられていた。アンケート結果は、とても良かった22%、良かった67%、どちらでもない9%であった。「少し、内容が難しかったが、今後の社会の動向を踏まえて、どのように指導していくべきかを考えることができた」などの感想があった。

■第4回:2024(令和6)年1月29日(月)

1月31日は、①看護倫理、②教育原理、③実習指導の体験を語り合うの講義、演習を企画し、研修会の最終回として閉講式・修了式を行った。

- ①看護倫理：実習を通して学生はどのように看護倫理を学ぶのかについて授業での実際の学生のレポートを紹介しながら学習内容を共有した。学生は看護実践を自分の言葉で語り、相手の話を聴き、価値観の相違を尊重しながら自己の看護観を整理し表現する授業がされていた。「公正」「身体拘束」「看護師の慣れと患者の尊厳」といったテーマで、実習で体験したもやもやした出来事に対し、ディスカッションを通して、いつでも結論が出せることばかりではないが、語ることが看護師の責任であることを学んでいる。また、安全が保たれ、自由に話し合える場を作ることも必要である。看護倫理の課題に気づき、考え、対話することが重要である。学生の気づきに対し、実習指導者が対話を通して共に考えることが学生の倫理観、看護観につながることを講義の中で学習できた。アンケート結果は、とてもよかった65%、よかった35%であった。「学生の考えや視点、価値観を知ることができてよかった」「臨床で働いていると忘れていたこと、当たり前になっていることを再認識できた」などの感想があった。
- ②教育原理：看護師ではない講師からの講義であり、日々行っている教育について俯瞰した感覚で講義を受けることができた。講義初めの、実習は教育であり訓練ではないという発言が心に残った。ともすれば実習指導は、新人看護師に対する指導のようになることも時にみられる。実習指導において実習指導者は臨床の指導者であり、学生は学習者ということを常に意識しなければならないと感じた。また教育の変遷を知り、時代や文化によって異なるものであると学ぶことができた。講義後のグループワークの際には受講生から、主体的な学習にするにはどうすればよいか、どのように意図的に接すれば教育として良くできるか、リフレクションなどの言葉も聞かれ、講義の内容を踏まえた発言をしていた。4回目の研修会での講義で、教育とはということを再認識する機会となっていた。アンケート結果は、とても良かった44%、よかった53%、どちらでもない3%であった。「多様性が求められる中での教育の考え方について学ぶことができた」「学習の仕方を学ばせ自律を支援すること、自分自身がまず学びのプロであることが大事なのだと学んだ」などの感想があった。
- ③実習指導の体験を語り合う：実習体験を語り合う（演習）目標である実際の実習指導で得た学びを深めるためにグループワークを実施。小グループ（同じメンバー）での意見交換のため、積極的のディスカッションしていた。前回の話し合い後、実習指導体験ができなかった研修生もいたが、他のメンバーの話を聞きよかったところ、を発言し、午前中に受けた講義からも、大切なところを共有しながらグループでの学びをまとめていた。小グループでのワーク時間も適切であったと。拡大グループでは、6グループが代表として学び発表しを全体で共有し、自己の学びにつながっていた。アンケート結果は、とても良かった60%、良かった37%、どちらでもない2%であった。「様々な人の体験談を聞いて、悩みや疑問点が共通するところが多かったと感じた。他者との意見交換が大事だと思った」、「最終的にまとめを行うことで、具体的に自分がこれからどういう実習を行いたいのかを考える機会になった」などの感想があった。

2) フロントシアセミナー

a. 趣旨

本部会は、本学の教育的機能を活用した人材育成、病院との協働、臨床実践能力の向上を目指し、タイムリーな配信を行う場と位置付けられている「フロントシアセミナー」の企画、運営を行う。

b. 活動内容

昨年度まで本部会では「認定看護師のためのスキルアップセミナー」も開催していたが、本学で認定看護師教育課程を終了してから長いこと等を鑑みて昨年度で終了となった。今年度は人数が減った部会員で「フロントシアセミナー」のみ開催した。今年度の「フロントシアセミナー」では、看護理論に焦点を当て、看護理論と看護実践の連なりを考えることが出来る機会となるよう、臨床の実践者と共に半年間かけて企画した。開催内容は以下の通りである。

テーマ：あるがままのその人を見る多職種協働-事例と看護理論を結びつけながら話し合おう

日時：2024（令和6）年2月24日（土）13時30分～15時30分 開催方法：Zoomウェビナー

内容：

①事例を振り返る

腹膜透析を導入したA氏への多職種協働～グループインタビューを通じた振り返り

語り手・実践者 前川 早智子（日本赤十字社医療センター 看護師）

山田 将平（日本赤十字社医療センター 腎臓内科医師）

岡 文恵（日本赤十字社医療センター メンタルヘルス科医師）

②事例と看護理論を結びつける

ベナー&ルーベル看護理論と結びつけたA氏への支援の考察

～グループインタビューでの語りを読み解きながら

解釈者・講師 細野 知子（日本赤十字看護大学准教授・基礎看護学）

テキスト P. ベナー&J.ルーベル『現象学的人間論と看護』（医学書院、1989/1999）

③総合討論

事例と看護理論を行き来しながら多職種協働の可能性を議論

当日は、企画及びグループインタビューに参加した3名の実践者もプレゼンテーションし、講師と共にセミナーを担った。総合討論ではチャットで質問が多数寄せられ、活発な議論が繰り広げられた。セミナー終了時には、企画に携わった同施設の石橋由孝腎臓内科部長、スミス美保子看護師長、アドバイザーの榊原哲也教授（東京女子大学）も挨拶し、企画者の顔が見えるセミナーとなった。参加者は73名であり、有料の参加者が44名、無料の参加者が29名（本学教員11名、大学院生5名、医療センター11名 実習指導者研修会研修生2名）であった。アンケート結果（回答率50.7%）からも、実践と理論を結び付けて意味づけるプロセスが学べた、グループインタビューによる振り返りにより協働実践の様子がよくわかった、看護理論をもっと学びたいと思った等、実践者にも研究者にも有意義な内容であったことが伺えた。また、本セミナーを経て、本学と日赤医療センターとの研究連携に発展させることができた。

c. 来年度の課題と展望

今年度のように臨床現場と共に企画を進められると、臨床と大学双方に有意義な内容になると考えるが、企画の負担が大きくなり過ぎないための工夫が必要である。

3) 赤十字リサーチ・フェスタ

a. 趣旨

赤十字リサーチ・フェスタは、赤十字系列の医療・福祉施設を中心に連携し、研究や教育の質を高め、より良い実践を行っていくことを目指す。

b. 活動内容

2024（令和6）年1月31日（水）17時15分～19時15分に赤十字リサーチ・フェスタを開催した。

今年度オンライン（Zoom）と日本赤十字社医療センター内一部対面のハイブリット形式で実施した。プログラムとしては本赤十字社医療センター「冬の院内看護研究発表会」参加および日本赤十字看護大学教員による6演題の研究発表とミニレクチャー、研究支援体制についての説明などであった。

今年度のミニレクチャーのテーマは「実践報告を通じて看護のちからを高めよう～実践報告を行う意義～」で、日本赤十字社医療センターより五十嵐夢乃氏、菊池麻衣子氏、水澤諒子氏から実際の取り組みについてシンポジウム形式で報告した。

研究支援体制の紹介では、昨年度より開始された医療センターと地域連携・フロンティアセンター実践教育部門の研究における連携（研究支援や共同研究等）が開始されたこと（現在4研究進行中）などが報告された。

当日の参加者は、日本赤十字社医療センター、日本赤十字看護大学などから、看護職、教員、大学院生など61名であった。

今回もオンライン中心のため、音声・共有画像のトラブルや参加者同士の交流が難しいという点では課題が残ったが、医療センター内・大学内のそれぞれの拠点で対応し、オンライン発表内容については事前に質問を募集して司会を中心に質疑応答を行うという方法で実施した。一方で、オンライン開催により、勤務後の時間帯、時短勤務や育休中、遠方等の状況にあっても参加が容易となった。

c. 来年度の課題と展望

次年度に向けては、日本赤十字社医療センターと日本赤十字看護大学との研究支援体制の連携さらなる強化し成果を報告すること、参加者の研究への関心が高まるような内容の充実を図り、さらに幅広く参加者を得られるようにすることが課題である。

3. さいたま地域連携委員会

1) 公開講座

a. 趣旨

地域住民、特に本学部の近隣地域の住民を対象として、地域住民の健康に関するニーズに基づいた知識を提供し、地域の健康づくりに寄与することを目的として開催している。

b. 活動内容

さいたま看護学部完成年度企画として公開講座を実施した。

テーマを、「災害に備える～暮らしの中での防災対策～」とし、第2部では防災士でもある元テレビ埼玉アナウンサーの菅久瑛麻氏を講師に「暮らしの中での防災、災害時の自助共助」について、埼玉県の特徴を踏まえて講演をしていただいた。第2部では、日本赤十字社埼玉県支部の赤十字救急法指導員を講師に、災害時の応急手当として三角巾を使った止血や包帯法について実技を交えて行った。

参加者は、埼玉県内を対象に60名（事前申込64名）、学生ボランティアと教職員17名であった。赤十字らしい企画で地域有力者の参加も多く、アンケート結果からも「内容に興味があった」とのご意見をいただき、今後の連携のきっかけとなった。

c. 来年度の課題と展望

参加申し込み方法など、今年度の状況を踏まえ、次年度計画を策定予定。

2) 大学コンソーシアムさいたま

a. 趣旨

「大学コンソーシアムさいたま」は、さいたま市内の大学相互の自主性を尊重しつつ、大学が有する知的資源を活用した活動を行うとともに、大学相互の連携及び交流と活力ある地域社会の形成及び発展に寄与することを目的として創設されたものである。さいたま看護学部では「大学コンソーシアムさいたま」に2020（令和2）年9月に加盟して、リレー講座活動に参加し共通テーマに沿った公開講座を実施している。

b. 活動内容

大学コンソーシアムの総会については、学長及びさいたま看護学部長、次長が参加し、情報交換を続けている。

「大学コンソーシアムさいたま」の活動の一環の、さいたま市民を対象とした加盟大学のリレー講座を実施した。コンソーシアム全体のリレー講座のテーマは、「心と体の健康」と設定され、これを踏まえてさいたま看護学部でのテーマは「キッズカレッジ からだの不思議」として、本学部白井美穂先生を講師に行った。参加者は、さいたま市内在住の親子18組57名（事前申込24組）、学生ボランティアと教職員29名であった。

アンケートからは、自分の身体についての内容だったこと、実際に自身では触れる機会がない聴診器や血圧計などに触れることのできる内容だったので、親子で楽しんでいただくことができた。

対象を低年齢層にしたことで新しいチャレンジではあったが、子供たちの参加で学内が賑やかになり、本学を保護者世代に知っていただくきっかけになった。

c. 来年度の課題と展望

次年度も継続して当大学コンソーシアムには、リレー講座への参加を継続として申し込みを実施していくこととする。

3) UR 都市機構との連携

a. 趣旨

UR 都市再生機構は、居住者が安心して暮らせるまちづくりを目指して健康づくりにも力を入れており、本学では 2021（令和 3）年度から UR の団地における健康づくりを連携して取り組んでいる。

b. 活動内容

2023（令和 5）年度は UR との意見交換を定期的に行い本学部と UR 都市機構との連携イベント「この夏 気をつけたい 子どもの健康・事故予防」講座をコンフォール南浦和団地の住民対象に、8 月 10 日（水）10 時～12 時に同団地内集会室において開催した。参加者数は 3 組 7 名の親子（当日 2 組 4 人のキャンセルがあった。参加した子どもの年齢は、0～9 才）であった。

講座は、同タイトルについて、本学部の小児看護学 吉野純先生によるミニ講座が行われた。講座の間、本学学生 8 名が参加した子どもたちに読み聞かせをした。（なお同活動については、UR のホームページに活動の様子が掲載された。）その後、母子全員に本学学生も加わり、うちわ作り（学生により下絵があるため、色塗作業）を実施した。アンケートの結果、好評でとても参考になったことやまた次回も参加したいというものであった。また、次回のテーマとして、仕事体験、子どものケガの対処法（脱臼）なども挙げられた。

今年度は会場の工事の都合で 1 回の開催となった。次年度は再度 2 回実施できる予定となっている。UR と大学との検討会では、今後は住民へのニーズ調査などを行うなどし、テーマの候補を検討することも考えられるといった意見も出されている。

c. 来年度の課題と展望

次年度も継続して UR と連携し健康教育などの実施を通して、地域の健康づくりに貢献する予定である。



子どもたちは自由にうちわに色を加えています。オリジナルうちわの完成です！



作ったうちわを片手に記念撮影。楽しい夏休みの思い出となりました



子どもたちに絵本の読み聞かせを行いました



学生のやさしい声も聴きながら、絵本から絵本の絵も見えています

4) 埼玉県内における2つの赤十字病院の看護師への研究指導

a. 趣旨

さいたま赤十字病院と深谷赤十字病院からの看護師へ研究指導の要請を受け、2021（令和3）年度から教員5名が定期的に研究指導を実施している。

b. 活動内容

今年度のさいたま赤十字病院への研究指導実績は、指導教員体制3名、研究指導本数21本（ベーシック18本、アドバンス3本）、研究指導5回、講義回数2回、院内発表1回であった。その他、他大学からの講師依頼については教員指導体制1名、講義5回、研修8回、研究指導7回、院内発表1回を実施した。深谷赤十字病院への研究指導実績は、指導教員体制3名、研究指導本数12本、研究指導10回、講義回数3回、院内発表1回であった。

c. 来年度の課題と展望

指導の要請は継続しており、次年度このような指導を継続する予定である。

5) 学内での活動の推進

a. 趣旨

さいたま看護学部は、今年度をもって完成年度を迎えた。
大学外の地域や組織との連携づくりのために学内の連携体制づくりが重要であると考えて様々な取り組みをしている。

b. 活動内容

- (1) 地域連携活動の外部への発信として、X (旧 twitter) による Daily News の発信をした。また「先生マルシェ」について、教員に担当可能な講演や研修について調査し、掲載内容や申請フォームを設定し大学ホームページに公開をした。
- (2) FDSD 部会でも当委員会との連携担当者を決めて連携体制が整っており、今年度は完成年度記念公開講座を学内でオンデマンド配信した。
- (3) さいたま看護学部内各委員会との連携し、大学としての取り組みの実態把握を継続している。また、学生日赤ボランティアとの情報共有を実施するとともに、地域連携委員会学生部会との連携を通じた地域住民との繋がりづくりに繋げられるように情報を収集した。
- (4) 2022 (令和 4) 年度に立ち上げた学生部会の今年度の活動は、学生の主体的な活動への取り組みがみられており、学生主催の地域連携に関する勉強会を、学生が講師になり、外部講師を招聘して1回開催した。また、公開講座や、地域包括支援センター依頼の地域行事やアンケートへの参加で協力をしている。

2023（令和5）年度 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター実績報告

作成年月 2024（令和6）年5月

発行 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター

編集 フロンティアセンター 広報

〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-1-3

日本赤十字看護大学 企画課企画振興係

電話：03-3409-0924

FAX：03-3409-0589
